

作物名：きゅうり

病害虫名：べと病（病原：*Pseudoperonospora cubensis*）

1 被害の特徴と診断のポイント

- 葉のみに発生する。
- 病斑は黄色く、葉脈に囲まれた角形で、多湿条件では病斑の裏面に紫黒色のかびを生ずる。激しく発病した葉は枯れてもろくなり、下葉から枯れ上がる。



写真1 葉の病徴

2 伝染源・伝染方法

- 本病菌は被害葉上で越冬し、分生子と子のう胞子を生じ、分生子が飛散し雨滴により伝染する。
- 葉の病斑上の分生子は風や雨滴（水滴）によって飛散し、二次伝染を繰り返す。
- 本病菌は純寄生菌であり、生きた植物体上でしか生活できない。
- 本病菌はかぼちゃを侵さないが、かぼちゃを侵す菌はきゅうりやその他のウリ類を侵す。

3 発病しやすい条件

- 本病菌は糸状菌の一種で、べん毛菌類に属し、分生子、分生子柄及び卵胞子を形成する。分生子の発芽適温は 21～24℃、分生子の形成適温は 15～20℃である。
- 分生子は水があると発芽して遊走子を放出し、べん毛により水中を移動したのち、発芽して葉の気孔から侵入する。このため、葉が濡れるような多湿条件で発生が多くなる。
- 感染最適温度は 20～25℃である。

4 防除方法

- 降雨や灌水の際の水のはね上がりによる伝染を防ぐため、ポリマルチ、敷わら等を設置する。
- ハウス栽培では夜間の温度が 10℃以下になると、被害が激しくなるので、夜温管理に注意する。
- 強度の摘心、着果過多、肥料切れなどによる草勢低下は発病を助長するので適正な栽培管理を行い、草勢の維持に努める。
- 薬剤防除は発生初期の予防に重点を置く。

5 その他

- 県内では Qol 剤（アゾキシストロピン水和剤、クレソキシムメチル水和剤）耐性菌の発生が確認されている。

※ 薬剤防除にあたっては耐性菌の発生を防止するため、同一系統薬剤の連用は避け、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。特に Qol 剤は、耐性菌の発生リスクが高いため、単剤で使用する場合は 1 作 1 回まで、効果が期待できる他成分を含む薬剤との混用又は混合剤の場合は 1 作 2 回までとする（下記ガイドライン参照）。本県では、2005 年にキュウリホモブシス根腐病が確認されており、2009 年にはメロンホモブシス根腐病も確認されている。

6 出典

（1）参考文献

- 日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）
- 農業総覧原色病害虫診断防除編 2-②（農文協）
- 農業総覧病害虫防除・資材編 2（農文協）
- 野菜・果樹・茶における Qol 剤及び SDHI 剤使用ガイドライン（日本植物病理学会殺菌剤耐性

菌研究会 <http://www.taiseikin.jp/guidelines/>)

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影



写真2 葉裏に生じたかび

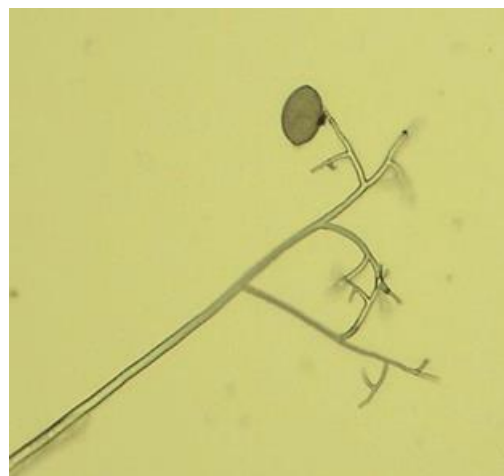


写真3 ベと病菌の分生子柄及び分生子

(令和5年9月改訂)